

琵琶湖活用の更なる広がりづくりについて

1 これまでの「びわ湖の日」の取組状況について

びわ湖の日は、その概ね前後1週間に県内全域で10万人以上が環境美化活動を行うなど、琵琶湖への思いをみんなで共有し、その総合保全に取り組む象徴的な日となっている。

びわ湖の日30周年(平成23年度)を契機に、「琵琶湖をきれいにする」に加えて、「豊かな琵琶湖を取り戻す」、「琵琶湖にもっと関わる」をびわ湖の日の取組の3本柱とし、市町をはじめ民間企業・大学等と連携した取組を進めている。

【主な取組】

琵琶湖をきれいにしよう

- びわ湖を美しくする運動

豊かな琵琶湖を取り戻そう

- 侵略的外来水生植物の駆除
- 外来魚駆除釣り大会

琵琶湖にもっと関わろう

- 琵琶湖の価値やびわ湖の日の意義を『広める』
- 身近な『食べる』ことから琵琶湖に関心をもつ企画
- 琵琶湖や暮らしとの関わりを『学ぶ』企画

2 平成30年度「びわ湖の日」の更なる展開について

県民のライフスタイルは多様化し、琵琶湖との関わり方やその時間は一人ひとり異なる。誰もが自分に合った方法で、より多くの方に琵琶湖に関わっていただけるよう、7月1日「びわ湖の日」を起点に概ね8月11日「山の日」までを琵琶湖に関わる重点期間に設定した。この期間を中心に、「この夏！びわ活！」をキャッチフレーズとして、多様な主体と連携して琵琶湖に関わる体験、活動、場所等にいざなうための情報を一体的かつ効果的に発信している。

平成30年度「びわ湖の日」の取組概要

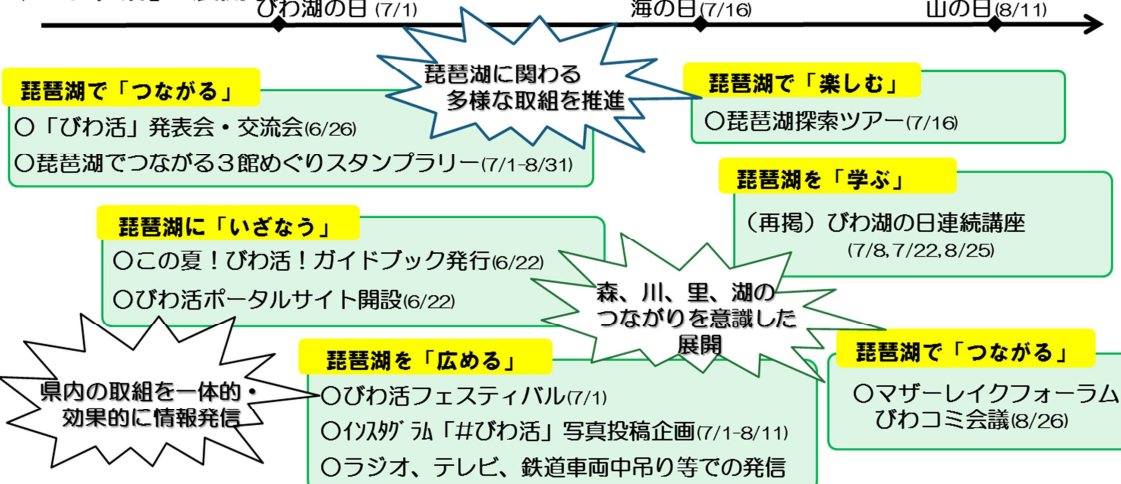
◇ 民間企業・大学・下流域との連携

- 包括連携協定締結事業者等との協働取組
・県産食材を中心にした関連商品の開発、販売(セブイレブン、平和堂)
・ポスター掲出

- 包括連携協定大学との連携
・ポスター作成(成安造形大学)
・連続講座開催
- 立命館大学 7-8月(3回)
- 龍谷大学 12-3月(4回)

- 下流域への取組
・京都市内学校(東山中学校)との連携(出前講座の開催 10-12月)
・京都市との連携(琵琶湖疏水記念館)
・大阪府内学校(清風南海高校)との連携(琵琶湖体験実習 8/1)

◇ 「びわ活」の展開



■「びわ活」とは、びわ湖の日(7/1)から山の日(8/11)までを重点期間とした、琵琶湖を守る、琵琶湖と暮らす、琵琶湖と親しむ、といった琵琶湖と関わるさまざまな取組や活動をいいます。

(1) 主な取組

①情報誌「この夏！びわ活！ガイドブック」の発行 …別冊参照

- ・ 琵琶湖に関わる体験等をまとめた情報誌を 17 万部発行。
県内小中学校(約 13.8 万人)に配付したほか、図書館、県・市町公的施設、琵琶湖博物館、大型商業施設、ローソン(一部店舗)等で配架。
- ・ びわ湖の日の学習に使える情報や、体験イベント、湖魚料理のレシピ、クーポン、寄附付き商品、ボランティア情報等を掲載。

②「びわ活」発表会・交流会の開催(6/26(火) 計 68 名参加)

- ・ 発表会では、県および大学 2 校(成安造形大学、立命館大学)、企業 3 社(㈱セブンイレブン・ジャパン、㈱平和堂、琵琶湖汽船㈱)と、びわこ豊穰の郷や国際ボランティア学生協会(IVUSA)等の 6 団体から、本年の取組を発表。
- ・ 交流会では、龍谷大学藤岡章子教授による講演「ソーシャル志向の価値共創マーケティング」の後、参加者で琵琶湖の価値について意見交換。
- ・ 参加者からは、「これまでの垣根を越えた交流ができた」と喜ぶ声があった。

③多様なメディア発信

- ラジオ(エフエム滋賀)「e-radio びわ活応援 week」6/25(月)～6/29(金)
- びわ湖放送での「びわ活」15 秒 CM 6/25(月)～7/1(日) 14 回
- J R 西日本(快速・新快速)車両中吊り広告(関西一円 2,250 車両)
6/29(金)～7/1(日) 3 日間

④下流域との連携

- ・ 京都市の琵琶湖疏水記念館、大津市歴史博物館、琵琶湖博物館が連携し 3 館を巡るスタンプラリーを実施。
7/1(日)～8/31(金)

(2) 「びわ活」の事業例

①びわ活フェスティバル 7/1(日) ガイドブック P. 12-13

実施主体： 琵琶湖保全再生課・イオンモール草津・びわ湖放送㈱

概要： びわ湖に関するクイズ等により、「びわ湖の日」や「びわ活」について周知。びわ湖放送の「野洲のおっさん琵琶湖一周」のゴールイベントや、イオンモール草津 10 周年イベントと連携し実施。

参加者数： 約 3,000 名程度

※民間イベントと連携したこと、ラジオ・テレビによる告知ができたことにより多くの方に参加いただけた。

感想等： この夏に琵琶湖で何かしてみたいと思った。/飲み水をありがとう。/大好きな琵琶湖が、ずっときれいであると良いなと思う。 等

②びわ湖の日連続講座 **ガイドブック P.15**

実施主体： 琵琶湖保全再生課・立命館大学

概要： 「琵琶湖と人の様々な関わり」を統一テーマに3回の連続講座を開催

第1回 7/8(日)「江戸時代の琵琶湖を知る－古文書から探る琵琶湖の魅力－」

第2回 7/22(日)「琵琶湖保全からエコツーリズムを考える」

第3回 8/25(土)「琵琶湖の魚を守ることと活かすこと」(予定)

※立命館大学のノウハウを活かした広報により、定員を超える応募があった。

参加者数： 7/8 開催分:120名、 7/22 開催分:100名

感想等： 琵琶湖1周に挑戦したい。/清掃活動に参加しようと思った。/外来種の駆除活動に参加したい。/琵琶湖についてあらゆる角度から知りたい。等

③平日ファミリー大津なぎさウォーク 7/17(火)、8/8(水) **ガイドブック P.17**

実施主体： NPO 法人滋賀県ウォーキング協会

概要： 夕方のさわやかな風と眺望を楽しむとともに、琵琶湖の恵みを再発見するウォーキングイベント。7/17にはミシガンにも乗船。

参加者数： 7/17 開催分:約 150名

※県内事業所より、「平日の夕方の行事は、会社ぐるみでの参加がしやすい」として内容について問合せがあった。

④びわこルールキッズ釣り大会 7/21(土) **ガイドブック P.53**

実施主体： 琵琶湖政策課

概要： 琵琶湖・淀川流域府県を中心とした県内外の小中学生に、外来魚の釣り上げを通じて琵琶湖の生態系の現状を知ってもらい、環境問題への意識とノーリリースの周知・定着を図る。

※外来魚駆除量：34.2 kg (ブルーギル 31.5 kg、ブラックバス 2.7 kg)

参加者数： 335名

感想等： 外来魚は思っていたよりたくさんいた。/これからも外来魚を駆除していきたい。/子どもたちは一生懸命かつ楽しんで釣っていた(保護者)。等

⑤琵琶湖探索ツアー 7/16 (月・海の日)

実施主体： 琵琶湖保全再生課

概要： 湖上体験、沖島で地引網漁体験・湖魚メニューの昼食、西の湖巡りなど、滋賀県にしかない価値や魅力を感じるツアーを実施。船上や昼食時に琵琶湖の現状や課題を伝え、自分で何ができるか考えていただいた。

参加者数： 60名 (うち県外参加者6名) ツアーの満足度：96%

※定員60名に対し400名以上の応募あり。ラジオでの周知による効果。

感想等： 初めての体験ができると思って参加した。/琵琶湖の清掃や外来魚駆除に参加したい。今後も湖魚を食べてみたい。/滋賀の豊かな自然を守ろうと思った。/カヌーやビワイチに挑戦してみたい。等

3 琵琶湖の活用と保全再生との好循環に向けて

(1) 現状・課題

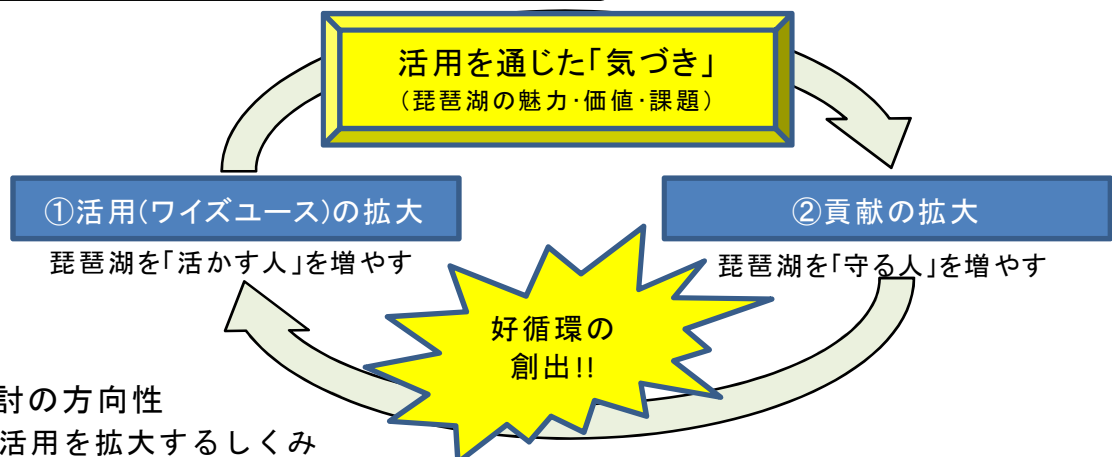
- 体験を通じ、琵琶湖の魅力や価値、課題等についての「気づき」を実感する声が多く、生活様式の変化に伴い、「気づき」を得るきっかけとなる「琵琶湖と関わる機会」が減少していると考えられる。
- 琵琶湖に関しては管理や規制の制度が複雑であり、体験学習等での活用や、湖岸清掃、外来魚駆除など保全再生への貢献を実践しようとした際に、問い合わせ先や助言を貰える相談先が分かりにくいとの声がある。
- 従来から保全再生の中心的な役割を担ってきた市民団体や自治会、環境関連施設、行政等の活動に加え、県内外の大学生や企業など、琵琶湖の保全再生に向けては新たな担い手の参画が進んでいるが、各主体の強みを活かした効果的・効率的な連携が十分になされているとは言えない状況がある。

(2) 求められる対応

『琵琶湖の活用と保全再生との好循環』の推進に向け、

- ① 琵琶湖との関わりを通じて、琵琶湖の魅力や価値・課題についての「気づき」を得る機会を創出するため、湖水浴や湖上体験、環境学習、湖魚食の推進、湖上スポーツなど、琵琶湖本来の価値を活かした様々な活用（ワイズユース）を拡大する。
- ② 琵琶湖の活用を通じて得た「気づき」を契機に、琵琶湖に関わる多様な主体がそれぞれの強みを活かして保全再生への貢献をいただくことができるよう、主体間の情報共有や、垣根を越えた交流・情報交換の場の確保、相談への対応、主体間のマッチングの推進等により、貢献を拡大する体制を整える。

琵琶湖を「活かす人」を、琵琶湖を「守る人」に



(3) 検討の方向性

①活用を拡大するしくみ

琵琶湖を取り巻く企業や大学、NPO などの多様な主体が集まるプラットフォームを設け、それを通じた情報交換や活用の機運醸成により、琵琶湖を活用する人の裾野を拡大。

②貢献を拡大するしくみ

琵琶湖の活用や保全再生にかかる窓口を設け、県内外からの問い合わせや相談等への対応を行うとともに、寄せられた相談内容の発信や①のプラットフォームを活かした情報共有、異なる主体間のマッチング等を推進し、各主体の強みを活かした琵琶湖への貢献を拡大。